特　集　－ヘルン没後100年とヘルン文庫－

「ヘルン文庫」再訪

東方学院長・東京大学名誉教授　前田専學（まえだせんがく）

去る５月のある日電話が鳴った。受話器をとりあげると，「NHK エデュケーショナルの安藤都紫雄ですが，今年はどういう年かご存じですか」という唐突な質問である。質問の意図がよく理解できなくて黙っていると，「今年は小泉八雲の没後100年の記念の年でしょう。それで八雲の没後100年に因んで，こころの時代で，小泉八雲の仏教観について話をして欲しい」という依頼であった。

大分以前から，そのようなテーマであちこちで研究を発表したり講演をしたりしているので，喜んでお引き受けすることにした。その時点では，録画の場所はまだ決まっていなかった。やがて安藤氏から，富山大学の「ヘルン文庫」で録画を撮ることにしたという連絡があり，かつて「ヘルン文庫」を訪問したときのことを懐かしく思い起こした。

あれはいまから13年前の，雪の降りしきる寒い平成３年２月４～６日の３日間のことであった。家内と私は，それぞれの調査目的をもって，「ヘルン文庫」を訪れ，幸い図書館の一室で仕事をする便宜が与えられた。

松江のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の旧居跡の小泉八雲記念館や，かつてハーンと縁があった熊本大学，東京大学，早稲田大学の図書館ならばいざしらず，なぜこのような，ハーンが一歩も足を印したこともない，しかもあまり便利とはいえないところに位置する富山大学の図書館に「ヘルン文庫」があるのか，と不思議に思いながらの旅であった。幸い図書館で見ることが出来た文献[1]によって，この謎は氷解した。南日恒太郎旧制富山高校初代校長とその弟田部隆次教授と馬場はる夫人との功績であることがわかったのである。

ハーンといえば，かつての筆者のように，おそらく「耳なし芳一」や「雪女」などの怪談の作者であるとのみ理解されている方が多いと思う。

ヘルン文庫を訪れられた前田専學氏

しかしハーンを調べるにつれて，その見方は間違いではないが，ハーンはそれだけで尽きる作家ではなく，再話文学者，日本研究家，民俗学者，料理研究家，教師・文芸評論家などなど，実に多面的な活躍をした著述家であることが分かってきたのである。筆者が注目しているのは，従来ハーン研究者が見過ごしがちであった，インド・仏教・ヒンドゥー教に強い関心を抱いているハーンである。

ハーンの作品の翻訳家として著名な平井呈一氏（1902-1976）によると，ハーンが仏教や東洋関係の書物を「ほとんど淫するほどに……嗜読」[2]したのは，ハーンのニューオーリンズ時代であったということである。すなわち1877年（明治10年）11月（27歳）から1887年６月までの10年間であったという。この事実は，「ヘルン文庫」の中に反映している。

ヘルン文庫は，生前ハーンが東京の西大久保の自宅に備えていた蔵書――アメリカ時代に買って日本にもってきた書物と来日してから日本で買っ

た書物からなる――，合計2,435冊と，ハーンが生きている間にその出版を見届けることが出来なかった『日本――一つの試論』の自筆の原稿（1200枚）から成っている。筆者のリスト[3]によれば，その全蔵書のうち，仏教関係の書物は，59冊，ヒンドゥー教関係の書物は――ヒンドゥー文学関係の書物は除く――，16冊，両者の合計は75冊にのぼっている。

ヘルン文庫所蔵の文献中ヒンドゥー教のバイブルともいわれる『バガヴァッド・ギーター』の仏訳 Burnouf, Emile. *La Bhagavad-gītā ou le chant du bienheureux, poème indien*（Paris: Duprat, 1861, 書架番号〔1636〕）を調べていたとき，偶然，白紙になっている裏の見返しの部分に，大変に興味深い鉛筆の書き込みを発見したときは，何かハーンの秘密に触れたような感激を味わった経験が未だに忘れられない[4]。このようなメモは，『バガヴァッド・ギーター』だけではなく，家内が調べていたヘルン文庫所蔵のインドの有名な叙事詩『マハーバーラタ』の英訳（書架番号〔1014〕-〔1017〕）と仏訳（書架番号〔1638〕）にも残されていた。ヘルン文庫のハーンの蔵書の書き込みをいつの日にか丹念に調べてみたいと思いながら，馬齢を重ねるばかりで，果たせないままであるのを遺憾に思っている。

時はいつしか流れ，平成16年6月22日午後4時ころ，前回の訪問の時とはうって変わって，真夏のように暑い富山の駅に降り，車で妻とともに再び富山大学図書館を訪れた。そこで一足早く着いて，ヘルン文庫での録画の準備をほぼ完了された安藤氏をはじめとするNHKの方々と合流した。

13年ぶりのヘルン文庫をみて驚きの連続であった。まず，以前にはヘルン文庫は図書館の2階にあったのに，今は5階にあるし，文庫の中もすっかり変わっている。もちろん図書館の方々もすっかり変わっている。当時の薄い『ヘルン文庫目録』（1927）は，改訂・増補されて，堂々たる分厚い改訂版（1999）に代わっている。また当時の『ヘルン関係文献解説付目録』も，すっかり改訂（1998）増補され，さらに第2次補遺版（1999）までも付加されている。

翌6月23日（水）午前10時ころから，ヘルン文庫に隣接した部屋で，「西洋と東洋の出会い――小泉八雲の仏教観――」と題する録画撮りが開始された。このときの対談者は，まったく偶然にもかつて東大教養学部時代の同級生白鳥元雄聖徳大学教授であった。

このときの録画は，平成16年7月11日（日）午前5時～6時NHK教育TVで放送され，7月18日（日）午後3時～4時に再放送された。この放送をみながら，富山大学附属図書館の方々が，じつに親切で，しかも録画撮りに協力的で，そのお陰で気持ちよく仕事が出来たことを思い起こし，この場を借りて，藤島隆事務部長，山田幸彦情報管理課長，柴田淳情報管理課総務係長をはじめ，ご協力頂いた皆様方に，心からの謝意を表する次第である。また，この録画を企画・作成してくださった安藤氏，ならびに貴重な時間を割いて出演してくださった白鳥教授に対しても深い感謝を申し述べたい。

〔注記〕

1　*Catalogue of the Lafcadio Hearn Library in the Toyama High School, 1927*；長井真琴「ヘルン文庫を観る」〔『宗教研究』新7巻3号〕1930，pp. 153-157；平田純「ヘルン文庫」（上）下）.

2　平井呈一『小泉八雲入門』古川書房，1976，p.31.

3　「ラフカディオ・ハーンと仏教」〔『雲藤義道喜寿記念論文集・宗教的真理と現代』教育新潮社，1993)〕，pp.11-26並びに「ラフカディオ・ハーンとヒンドゥー教」〔『東方学会創立記念五十周年記念・東方学論集』東京・東方学会〕，pp. 1265-76.

4　この書き込みについては，前引の「ラフカディオ・ハーンとヒンドゥー教」の注記10に詳しく記しておいたので参照されたい。